

現代ギリシア詩に於ける「俳句」の受容（2） —D.I.アンドニウの「俳諧と短歌」に見られるモチーフについて—

高橋 りえこ

1. 詩人アンドニウとその作品について

1. 1. 詩人の生涯

Δ.I.アンドニウ（1906年—1994年）は、1930年代を代表する詩人で個人的な友人でもあるΓ.セフェリスをはじめ、文学評論家A.カランドニスや文学研究家Γ.カツインバリスに高く評価された詩人であり、同時にまた船乗りでもある。モザンビークの海港ベイラで、ギリシアのドデカニサ出身の両親の間に生まれた。幼少期をベイラで過ごし、その後両親とアテネに戻り中学校を終える。卒業後は乗船し、見習い期間を経て船長の資格を修得する。主にヨーロッパに向けて物資を輸送する貨物船を操った。第二次世界対戦中も船を降りることなく、エーゲ海保安のために海軍に従軍した。正にセフェリスがアンドニウを称して「海の友」¹⁾と呼んだように、その生涯の大半を洋上で過ごした「海の人」と言えるだろう。

1. 2. 作品について

アンドニウを知る人が語るように、「寡黙の人」であった詩人は、作品の数と長さから見ても寡黙であった。感想を求めて、ごく小数の知人に自作の作品を送る程度であったが、その読者の勧めによって、詩の他に随筆や翻訳を『息吹』『新文学』『英希評論』などの文学誌に公表した。後に公表作品は発表年代に従い五つの詩集—即ち三つの『全詩集』と『インド』『俳諧と短歌』—に収められている。

作詩に際して、アンドニウは「表現の正確な重さ」²⁾を測定するかのよう
に言葉を吟味厳選し、表現上の強調や誇張を排する姿勢をとっている。文学
研究者K.ディマラス（1983年）はアンドニウの作詩法について、「余分なも
のを削除、偽らざるインスピレーションをそのまま凍結してしまうようだ」
と述べている。またカランドニス（1971年）の分析によると、簡潔で断片的

な作品は同世代のΓ.サラングリスやA.ドリヴァスにも多く、三者に共通して主観主義的詩調が看取できるが、その中でアンドニウの作品には「音楽家が自己の内面を独自する」のを聴くかのような音楽性があると評している。上で触れた作詩の方法は、後述する俳句詩型や短歌詩型を好んで用いた点と何らかの関連性があるように思われる。

作品の詩材に関しては、その多くを自らの航海での体験や詩人の周囲にある自然に素材を求める傾向が見られる。そしてこれらの素材はI.M.ハジフォティスの指摘¹⁾のように、あたかも渦を巻くように幾度も繰り返し用いられている。

作品を貫く中心的主題は、陸地への郷愁・かつての航海への懐旧の情・新たな航海に向ける期待といった船乗りの感傷だけではなく、人生という航海に於いて、生きる意味を探求する詩人自身の癒されない苦悩と不安でもあると言えると思われる。作品には人生に対する教訓的な哲学詩として解釈され得るものもあるが、上述のカランドニスの評を待つまでもなく、詩人の視線は常に自己の内側へ向けられており、その作品は詩人の内観、換言すれば個人的な精神的思索の記録と見なせよう。

2. 詩集『俳諧と短歌』について

2. 1. 俳句の受容過程と詩集

現代ギリシア詩に俳句が受容された過程に於いて、詩人アンドニウと詩集『俳諧と短歌』がどのように位置づけられているか簡単に述べておきたい。

俳句がギリシア詩壇を沸かせ、俳句詩型が現代詩に浸透していった過程の概略は『プロピレア』5号で触れた。¹⁾その受容過程に於いてアンドニウが果たした役割は注目に値する。Γ.Π.サヴィデイス(1973年)の俳句受容に関する考察は次のように整理される。

俳句が詩壇に登場した当初、俳句は「数行からなる短い詩」であると誤って理解された。しかし俳句詩型詩—一行及び三行目が五音節、二行目が七音節からなる音律をもつ三行詩—をアンドニウが発表したことが契機となり、この詩型が俳句或いは俳諧という名称で定着していった。ギリシア詩壇に於ける1970年代の俳句の流行こそはセフェリスのノーベル文学賞授賞に因るところが大きいものの、アンドニウのこの「功績」は現代ギリシア文学史の中でアンドニウを俳句の「公式な」紹介者として位置づけるのに充分であろう。

また詩集『俳諧と短歌』の出版(1972年)に際して、これに収められている

短歌詩型詩-5-7-5-7-7の音律をもつ七行詩-が、詩壇に登場した最初のギリシア語による短歌であるとも述べている。

『俳諧と短歌』には1938年から1962年にかけて(42年から45年の間一時中断)文学誌『新文学』に発表された俳句・短歌詩型詩が156、発表順に収められている。上述のサヴィデイスの指摘から、この『俳諧と短歌』は、ギリシア詩壇への俳句受容を考察するとき特筆されるべき作品であると結論づけられるだろう。

2. 2. 『俳諧と短歌』にみられるモチーフ

アンドニウと彼の『俳諧と短歌』が俳句の受容過程で果たした役割に関して、2.1.で引用したサヴィデイスをはじめ若干の記述がある。しかしその一方で、セフェリスの場合¹⁾と同様に作品そのものについての言及は筆者が把握している限りにおいて、殆ど為されていない。そこで今回は主に詩題とモチーフとの関連を中心に置いて詩集の特徴を整理してみたいと思う。

詩集『俳諧と短歌』で頻繁に使用されているモチーフは、航海に拘る素材(1.2.を参照)とそれ以外のものに大別される。そして前者は航行に於ける情景描写の際に用いられるのに対して、後者は詩人の内観が描かれる時に見られる。このことから作品の主題が航海そのものに関連しているのか(2.2.1.)、或いは詩人の内面に関するものであると解釈されるか(2.2.2.)により素材の分類を行った。尚、作品の引用に際して、俳句詩型詩をh・短歌詩型詩をtと表示し分け、詩集の中で発表順に従って付けられている通し番号をそのまま用いている。また、日本語訳は全て筆者によるものである。

2. 2. 1.

航海がテーマである作品に用いられている詩材は星・霧・鳥等のモチーフの他に、詩人が洋上で見た日の出・日没の情景が挙げられる。

◆星(南十字星)

h 106 十字の星
我と共に
フリオ岬で

Του Σαυρού τ'άστρα
κι οι άλμπατρος μαζί μου
στον κάβο Φρίο.²⁾

h 107 十字の星が
夜 そしてアホウドリが
昼 案内をした

Του Σταυρού τ'άστρα
τη νύχτα κι οι άλμπατρος
μέρα οδηγούσαν.

◆霧

- h 100 荒れ野の蜘蛛
彼の一瞥が かき消した
何という霧！
- Ερμιάς αράχνης
καθάρισ'η ματιά του
πόσες ομίχλες !
- h 101 かの船長
霧を晴らさん
蜘蛛の子の如く
- Ο καπετάνιος
καθάριζεν ομίχλες
σαν τις αράχνες !

◆鳥（かもめ）

- h 91 あの男は かもめと
沈黙を道連れに ただ独り
他所者を連れていた
- Αυτός με γλάρους
και σιωπή, μονάχος
έφερνε ξένους.

上掲の作品に於いて、「あの男」（＝詩人アンドニウ）が外国人の船員と共に航行している様を描いていると解釈される。

◆洋上でみた日没・日の出の情景

ここに挙げる作品には情景の色彩・明暗が素描されているという点が、描出の特徴として指摘されるだろう。色彩については日没・日の出共に紫色と黒・黄色・こがね色の組み合わせがみられる。

◇日没

- h 108 霞む空と
泳ぐ色
覚えておくがよい
- Με θολό ουρανό
κολυμπάν τα χρώματα,
μην τα ξεμάθεις.
- h 109 黒 黄色が
日暮れの 茜色の中
青白く ひかる
- Μαύρα, κίτρινα
σ'ερυθρόδαμα' δύσης
πρασινοφέγγαν.
- t 7 また次の日没のために
沈んだ
ほのおの 薔薇
別離の雨の中
初めの暁を忘れて
- Για μια άλλη δύση
φλογερά μαδούσανε
τα τριαντάφυλλα
σε αποχωρισμού βροχή
την πρώτη αυγή ξεχνώντας.

◇日の出

- | | | |
|------|--|--|
| t 1 | 東の方角に みた
すみれ色の 敷物
引き裂いていく
黒と黄色の竜
燃えて黄金になる前に | Σ' ανατολή είδε
μενεξεδένιο στρώμα
και να το σκίζει
μαυροκίτρινος δράκος
πριν καούν στο χρυσάφι. |
| t 2 | アガパンサスで
花盛りの平原
そこで見た
黒と黄の竜が引き裂くのを
金色に焦がしてしまう前に | Από αγαπάνθους
ολάνθιστος ο κάμπος
που είδα να σκίζει
μαυροκίτρινος δράκος
πριν τους κάψει χρυσάφι |
| h 96 | 真珠のかがやき
「一日」が その始まりに
お前を憶えて | Μαργαροφέγγει
μέρα στον ερχομό της
που σε θυμάται. |
| t 3 | 真珠のかがやき
「一日」の目覚め
追いついてしまう前に
瞳の中に 描いてごらん
金で飾られた矢を | Μαργαροφέγγει
το ξύπνημα της μέρας
πριν να το φτάσει
στα μάτια σου ζωγράφει
χρυσόπλουμη σαίτα |
| t 14 | ほの暗い空に
霞む海は
待っていた
近寄り言った ここで
再会するだろう 太陽と | Σε ουρανό θολό
βουρκωμένες θάλασσες
τον περίμεναν
που είπε φτάνοντας : εδώ
θα ξαναβρώ τον ήλιο... |

◆出帆

- | | | |
|------|--|--|
| t 13 | 霞の中 再び
近寄り言った 掲揚！
我らの旗を
天 穏やかに
海 我らと共に | Σε αντάρα πάλι
φτάνοντας είπε: υψώστε
τη σημαία μας !
Ουρανός να μερέψει,
μαζί μου κι η θάλασσα. |
|------|--|--|

この他に、風に誘われるように、新たなる航海へ気持ちを掻き立てられる詩人の様子を描写した作品がある。

h 93 幾度も その風が φορές ο αγέρας
我を捕らえ そして渴く με παίρνει και διψάω
別の場所へと και σ'άλλους τόπους.

t 9 山へ行った Στο βουνό πήγα
海を忘れて ξεχνώντας τη θάλασσα
だのに 吹いた風 μα αυτός που φύσηξε
お前の声を 乗せて φέρνοντας τη φωνή σου.
またも 苦い海! πάλι πικροθάλασσα !

2. 2. 2.

詩集『俳諧と短歌』に収められている作品中、詩人の内観を描いた作品は詩材の用い方に関して、詩集『インド』とかなり類似しているように思われる。この点については機会を改めて述べることにして、ここでは『俳句と短歌』を対象を絞り、アンドニウが自らの内面を描出する時、どのような素材を用いているかをまとめてみた。

◆蝶

実際に詩人の船室には蝶の標本が掛けられていた。

h 89 お前の無情に Στην απονιά σου
釘付けされた その心 καρφωμένη η καρδιά του,
蝶のよう σαν πεταλούδα.

h 90 蝶 一羽 Μία πεταλούδα
針にとめられ苦しみがく σπαρταρά καρφωμένη
その無情の中 στην απονιά της

t 23 どれくらい 無情 ‘Απονη πόσο’
想い出しもせず που δεν ξαναθυμάται
ただ 見ている μόνο τον βλέπει
羽根をバタつかせるのを να χτυπά τα φτερά του,
捕われた蝶 πιασμένη πεταλούδα.

上の作品のうち特に t 23では、苦悩する詩人 (= 羽根を打つ彼) を標本の蝶が眺めているという視点の転換が見られる。

◇破れた夢

ここでは実現されなかった夢、或いは叶わなかった希望が結実しない「花」で表されている。

h 87 実を結ぶ前に 落ちる Πριν δέσει πέφτει
実の上に つぼみが σε καρπό το μπουμπούκι
隕石のよう σαν πεφτάστερο !

h 88 最後の花 Στερνό λουλούδι,
なのに落ちる 実をつける前に μα πριν δέσει πέφτει
願い事をする私 κάτω την ευχή.

t 6 実を結ぶ前に 落ちる Πέφτει πριν δέσει
全開の花 τ'ολάνοιχτο λουλούδι
隕石のように σαν πεφτάστερο
ある日の正午 μια μέρα μεσημέρι
無関心なお前の手に στ'αδιάφορο χέρι σου.

◇日常を彩るもの－変化の乏しい日常が「花のない毎日」と表されている。

h 53 「毎日」 Το κάθε μέρα
見慣れない 石のように冷ややかで ξένο ψυχρό σαν πέτρα
花もなく δίχως λουλούδι.

h 54 花がなく Δίχως λουλούδι
石のように冷ややかで και το ψυχρό σαν πέτρα
「毎日」 το κάθε μέρα.

3. 展望にかえて

今回は俳句の受容過程に於いて詩人アンドニウが果たした役割を整理すると同時に、詩集『俳諧と短歌』に用いられている素材の一部を作品の主題に関連づけて分類を試みた。分類の際に保留にしておいた詩集『俳諧と短歌』と『インド』の間に見られる主題とモチーフに関する類似性については、別の機会に触れようと思う。またアンドニウの作詩技法の特徴についても再度考察を行いたい。

尚、本稿は1994年7月9日に開かれた第六回ギリシア語・文学研究発表会での報告内容に加筆したものである。

4. 註

- 1) Σεφέρης Γ., (1984): *Ο θαλασσινός φίλος μας, Δοκιμές τόμ.α΄*, έκδ. ΙΚΑΡΟΣ, Αθήνα.
- 2) Friar K., (1982): *Modern Greek Poetry—From Cavafis to Elytis*, 2nd ed, Athens
- 3) Χατζηφώτης Ι.Μ.: *Δ.Ι.Αντωνίου Μεγάλη Εγκυκλοπαίδεια της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας*, εκδ.Χ.Πάτση, τόμ.β΄, σσ.208
- 4) 高橋りえこ「現代ギリシア詩に於ける「俳句」の受容（1）—セフェリスの『練習帖』『練習帖（2）』を中心に—」『プロピレア』5号p.75—89
- 5) 同上を参照されたい。
- 6) アフリカ南部・ナミビア北西端の太平洋に突出する岬。
- 7) *ερυθρόδαμα*は、恐らく *ερυθρόδανον*（学名を *Rubiatinctorum*、また英語名を *madder wort*、和名をセイヨウアカネと言ひ、この根から赤い色の天然染料をとつた）ではないかと思われる。
- 8) Γράμματα της Αττικής Άνοιξης (Ποιήματα, 1939)

5. テキスト及び参考文献

テキスト

- Αντωνίου Δ.Ι. (1981): *Χάι-Κάι και Τάνκα*, ΕΡΜΗΣ, ἀνατύπ. Αθήνα
参考文献
- Βούρτσης Ι.Μ. (1982): *Βιβλιογραφία Δ.Ι.Αντωνίου*, Αθήνα
- Δημαράς Κ.Θ. (1983): *Ιστορία της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας*, ζ΄εκδ. Αθήνα
- Ελύτης Ο. (1974): *Το χρονικό μιας δεκαετίας, Άνοιχτά Χαρτιά*, Αθήνα
- Καραντώνης Α. (1971): *Εισαγωγή στη νεώτερη ποίηση*, Αθήνα
(1977): Δ.Ι.Αντωνίου *Ινδίες και Χάι-Κάι και Τάνκα*, *Νεοελληνική Λογοτεχνία. Φυσιολογικές*, γ΄εκδ. τόμ.β΄σσ.271-278, σσ.629-630, Αθήνα
(1984): *Γύρω από τη σύγχρονη ελληνική ποίηση*, γ΄εκδ. Αθήνα.
- Σαββίδης Γ.Π. (1973): *Τάνκα και Χάικου ή τα νυχτογιασεμιά, Πάνω Νερά*, Αθήνα.